

特別寄稿

蔵書に残された田中萃一郎と アンリ・ジョリー (Henri L. Joly) の交友

こやま のぼる
小山 騰

(ケンブリッジ大学図書館OB)

1 田中文庫の中の8点の著作

田中萃一郎（慶應義塾大学教授、法学博士、1873-1923）は将来を嘱望された東洋史学者で、漢籍、英・独・仏語の文献を駆使したさらなる業績や成果が期待されていたが、50歳という比較的若い年齢で死去した。また、田中は希有の愛書家で、その蔵書は没後、慶應義塾大学図書館に収蔵された。現在三田メディアセンターに田中文庫として和漢書2545部11894冊、洋書1535部1893冊が保存されている。その田中文庫に8点のアンリ・ジョリー (Henri L. Joly, 1876-1920) が執筆した洋書が含まれている。厳密にいえば3点の洋書と5点の論文の抜刷であり、論文はかなり長文である。これらは『田中萃一郎氏洋書目録』にも記載されている。

このたび三田メディアセンターにおいて、これらの資料を実際に手にして研究する機会があったため、その成果の一部を本稿において紹介したい。

19世紀後半に欧米ではジャポニスムが流行し、浮世絵版画、鐸などの刀装具、根付などの日本の美術品が人気を博し、それらが多く収集された。20世紀に入るとジャポニスムはジャポノロジー（日本研究）に進展し、日本美術の研究が発達した。アンリ・ジョリーはロンドンに在住したフランス人で、和古書などの日本語文献を駆使して鐸などの刀装具を研究し、歐州稀観の大家といわれた。彼の強みは個人の収集家の目録を編纂したことからもわかるように、多くの実物を調査し、さらに和古書などの文献を読解することができた点であった。

アンリ・ジョリーはロンドンの自宅に日本語書籍文庫 (Japanese Library) を維持していたが、そこに収蔵されていた和古書などの多くは田中萃一郎が日本から送付したものであった。田中萃一郎とアンリ・ジョリーの間には書籍を中心とした学問的な交流があった。学術交流といつても、実際には田中が

日本語文献をジョリーに送り、彼の日本研究を援助したという側面が大きい。田中文庫に含まれる8点は、ジョリーが田中に送付した自分の著作物で、田中の援助に対する感謝の表示であった。いわば田中側に残された二人の友情のあかしと考えられる。

田中萃一郎とアンリ・ジョリーの交友については、両人が夭折したのであまり知られていない。管見によると、田中の同僚・友人であった幸田成友が『三田評論』の記事で、以下のように二回言及していただけである。

留学中に外国人の友人がたつた一人出来ては帰国後も依然交際を続けられた。嘗て君〔田中〕が刀剣会誌を買はれるのを見て、自分は余りに不思議に思つて質問した時に、之はその紳士に贈るのであると語られたが、右の紳士は君に先立つて歿したさうである。読書人に朋友は少いものである。又少いのが当然であると自分は固く信ずる。死ぬまで君と交際を続けた英國紳士は確かに君の友人であつたに相違ない。名前は承はつたのであるが、不覚にも忘れて仕舞つた¹⁾。

留学中日本の鐸のことを研究してゐる英人某と懇意になり、それが贈つて来た本だといふ美本を奥さんから示されました、肝要の名前を記憶しません²⁾。

2番目の引用の中で触れられてる美本については後述する予定である。いずれにしても田中萃一郎とアンリ・ジョリーの交友は地理的にも日英間にまたがる国際的なものであり、時間的にも13年間という長期間に及んだ。全容ではないにしても、田中文庫に残された8点の洋書を点検すると、その一部を垣間見ることができる。本稿では8点の著作を起点と

して、今回の場合はその中の一部を利用するに過ぎないが、二人の俊英の交流の一端をさぐってみたい。

そこで、最初に8点のジョリーの著作を列記する。論文の抜刷の場合、掲載誌の誌名を加えた。なお参考のため、タイトルの日本語訳も追加した。

(図書)

- ① Legend in Japanese art: a description of historical episodes, legendary characters, folk-lore, myths, religious symbolism illustrated in the arts of old Japan, London: John Lane the Bodley Head, 1908. (『日本美術の中の伝説: 古き日本の美術に図示された歴史的な挿話、伝説上の人物、民話、神話、宗教的象徴の記述』)
- ② Japanese sword-mounts: a descriptive catalogue of the collection of J. C. Hawkshaw, [Reading]: Tokio Printing Office (printer), 1910. (『日本の鐔: J・C・ホークショウ・コレクション記述目録』)
- ③ The sword book in Honchō gunkikō / Arai Hakuseki. and the Book of samé: Kōhiseigi / of Inaba Tsūriō; [translated by Henri L. Joly & Inada Hogitaro], [London]: Henri L. Joly, 1913. (『新井白石: 本朝軍器考《剣刀類》・稻葉通龍: 鮫皮精義』アンリ・L・ジョリー、稻田賀太郎共訳)

(論文)

- ④ 'Introduction à l'étude des montures de sabres japonais', *Bulletin de la Société franco-japonaise de Paris*, No.14. (『刀装具研究入門』, 『巴里日仏協会誌』第14号 1909年)
- ⑤ 'Note sur le manuscrit "Toban shinpin zukan" de la bibliothèque de Nordenskiold', *Bulletin de la Société franco-japonaise de Paris*, No.28. (『ノルデンショルド・コレクションの写本『刀盤神品図鑑』についての覚書』, 『巴里日仏協会誌』第28号 1912年)
- ⑥ 'Meiji Tenno, 1852-1912', *Transactions and proceedings of the Japan Society, London*, Vol. 10. (『明治天皇, 1852-1912』, 『倫敦日本協会雑誌』第10巻 1913年)
- ⑦ 'Random notes on dances, masks, and early

forms of theatre in Japan', *Transactions and proceedings of the Japan Society, London*, Vol. 11. (『日本における舞踊、仮面、早期の演劇形態についての雑記』, 『倫敦日本協会雑誌』第11巻 1914年)

- ⑧ 'Inscriptions on Japanese sword fittings', *Transactions and proceedings of the Japan Society, London*, Vol. 15. (『刀装具に記された銘』, 『倫敦日本協会雑誌』第15巻 1917年)

上記した8点の著作には、送り主であるアンリ・ジョリーが付した謝辞、また受け取った田中萃一郎が記した書込みなども残されている。それらを子細に点検するといろいろと興味深いことがわかる。たとえば、アンリ・ジョリーは⑦「日本における舞踊、仮面、早期の演劇形態についての雑記」に、「田中萃一郎殿」と漢字で記し、その後に自分の花押を書き入れていた。この頃(1914年当時)になると彼は漢字も自由に書くことができ、さらに彼は当時金工師の花押を研究していたので、自分の署名も花押に似せて書き入れたのである。また同抜刷の最後(page74)で、ジョリーは間接的ではあるが日本語文献を送付してくれた田中に対する謝辞を表明していた。田中はその部分の下に「June 12th 1914 S. Tanaka」と書き入れていた(図1)。それはジョリーの意図および意味は了解したという田中のサインであった。

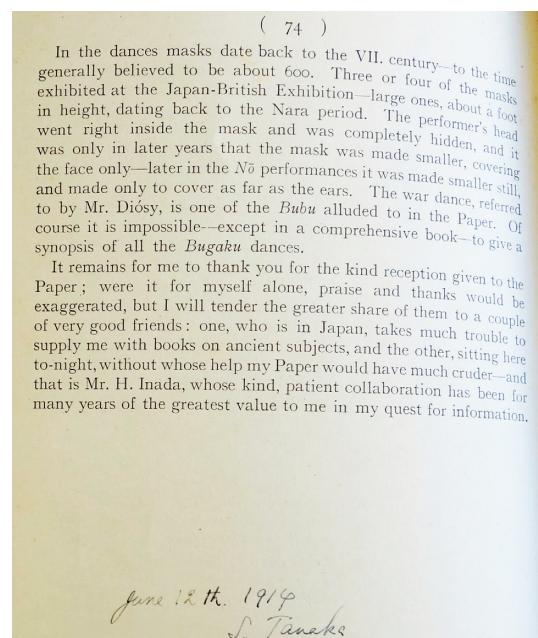


図1 1914年6月12日の書入れ

また、⑤「ノルデンショルド・コレクションの写本『刀盤神品図鑑』についての覚書」には、田中は『国書解題』に「刀盤図鑑 写本一巻 卷首に刀盤賞鑑口訣を掲げたり 著者年代共に不詳」という記述があることを書き入れていた。松宮觀山の『刀盤神品図鑑』(『刀盤賞鑑口訣』)は日本の鑑についての最初の研究書であるといわれ、同書は探検家アドルフ・エリク・ノルデンショルドが日本で1879年に収集し、スウェーデンの王立図書館に収蔵されたノルデンショルド・コレクションの中に含まれている。ジョリーはインターネットライブラリー・ローンのはしりのようなサービスを使い、同書をスウェーデンの王立図書館から借り出し、地元の公共図書館(ロンドンのチャーチル区図書館)で閲覧し、「ノルデンショルド・コレクションの写本『刀盤神品図鑑』についての覚書」を書き上げた。同論文は『刀盤神品図鑑』(『刀盤賞鑑口訣』)紹介の嚆矢であった。

さらに、これは書入れではないが、出版物の中でジョリーは田中の援助に対する謝意を表明していた。すなわち、③『新井白石：本朝軍器考《剣刀類》・稻葉通龍：鮫皮精義』の序文で、ジョリーは自分の日本語書籍文庫に言及し、日本語書籍を収集することができたのは二、三人の日本の友人、主に慶應義塾大学の田中萃一郎の援助によると感謝していた³⁾。

実はアンリ・ジョリーの日本の刀剣・刀装具研究の画期になったのは、新井白石が著した『本朝軍器考』の「剣刀類」という部分の紹介である。在英中にアンリ・ジョリーの刀剣・刀装具研究を知った田中萃一郎は、帰国後に『本朝軍器考』をジョリーに送付し(または教示し)、ジョリーはそれを在英中の日本美術商である稻田賀太郎の手助けで読解し、まず④「刀装具研究入門」を執筆した。後年再び稻田賀太郎が来英した時に、ジョリーは稻葉通龍の『鮫皮精義』を同じ稻田の援助で英訳し、両書(『本朝軍器考』と『鮫皮精義』)の英訳を一冊本として刊行したのである。そのような事情があったので、ジョリーは③と④を田中萃一郎に贈与したのである(図2)。

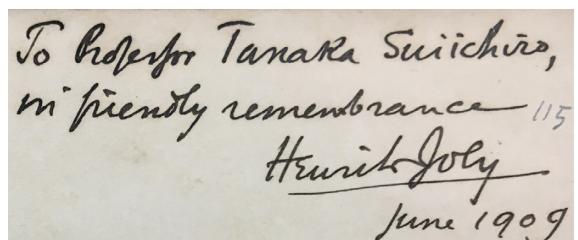


図2 1909年6月の献辞

以上のように、田中文庫に含まれる8点の洋書には興味深い話がいくつかあるが、字数の関係で今回は田中萃一郎とアンリ・ジョリーの交流のきっかけとなった①『日本美術の中の伝説』に焦点を当てるにすることにする。幸田成友の『三田評論』からの引用の中で美本として言及された書籍である。アンリ・ジョリーの半生、『日本美術の中の伝説』刊行の前史を含めて同書について解説を加えてみたい。

2 田中萃一郎とアンリ・ジョリーの交流のきっかけとなった『日本美術の中の伝説』

新進気鋭の歴史学者田中萃一郎は慶應義塾大学の留学生として1905年から3年間欧州に派遣され、1907年12月に帰朝した。最初ロンドンに滞在し、その後ドイツに移り、またロンドンに戻ったようである。いずれにしても留学の最終年にあたる1907年頃には、田中はほとんどロンドンで留学生活を送っていたと思われる。

田中萃一郎は、幸田成友の著作などで触れられているようにロンドンの大英博物館図書館で太平天国の乱に関するゴードン将軍の史料などを書写していた。その時、同じように同図書館を利用していたアンリ・ジョリーが、日本人の田中を見つけて声をかけ、二人は知己になったようである。時期ははっきりしないが、もしそれが1907年の春頃とすると、田中が34歳、ジョリーが31歳になったばかりの頃であった。ジョリーは田中よりも3歳年下であったが、幸田も言及したように田中が死亡する年より3年ほど前に44歳で病死した。

ではジョリーはなぜ大英博物館図書館で田中に近づいたのであろうか。それには理由があった。ジョリーは大英博物館図書館で日本語文献、特に和古書を利用していたが、その読解について田中に援助を求めたのである。なぜジョリーは和古書を読解する必要があったのであろうか。それは『日本美術の

中の伝説』刊行の前史に関係していた。

アンリ・ジョリーは1876年にフランスのロワール地方で生まれた。その後、同地方のアンジェ市にあったエコール・ダール・ゼ・メティエ (Ecole d' Arts et Métiers) という工学校（全寮制の寄宿学校）を卒業した。同校は現在のパリ・テック（グラン・ゼコール）につながる教育機関であった。パリで3年ほど電気技術者として働いた後、1898年22歳の時にロンドンに移住し、電池の専門家として電気自動車の会社に勤務した。そして、ロンドンが彼の終焉の地となった。

19世紀の末期から20世紀の初頭にかけては、電気自動車はまだガソリン車などの内燃機関を動力とする自動車に駆逐されていなかった。しかし田中とジョリーがロンドンで出会った年の翌年にあたる1908年頃になると、ヘンリー・フォードによってT型フォードが導入され、それ以降、低価格のガソリン車が高価格の電気自動車を圧倒することになった。電気自動車を製造する会社は衰退に向かい始めていた。アンリ・ジョリーが勤務していたエレクトロモーバイル社も、事業の中心を電気自動車の利点を生かした運転手付きのハイヤーなどのサービスに移すことになった。

アンリ・ジョリーはパリに在住していた時代（19世紀末）からすでに日本の鐔などの刀装具や根付などの提物を集め始めていたかもしれない。ただ本格的に日本の美術商やオークション・ハウスなどを通じて収集を開始したのはロンドンに移住してからのことであった。彼の場合、単に日本の美術品を集めただけではなく、それらの美術品の画題（モティーフ）について研究を開始した。具体的には美術品に表象されている日本の伝説、歴史的な挿話などについてメモをとり、それらのデータベースを作成し始めた。自身が身を置く産業が衰退の一途を辿っていたこともあり、アンリ・ジョリーはますます日本美術研究にのめり込み、生きがいは日本美術品の収集と研究に移行していた。

日本の美術品に表示された画題の研究についてはそれなりの歴史があった。もともと西洋美術と比べると、欧米では日本美術の画題はほとんど知られていなかった。そこで、日本の美術研究のパイオニア、たとえばウイリアム・アンダーソンなどは日本美術に関係する日本の伝説や歴史的な挿話などについて、

彼の主要な著作である『大英博物館所蔵日本中国絵画目録』⁴⁾で情報の典拠である絵手本のタイトルを含め、詳細な解説を加えた。また、それらのアンダーソン旧蔵の絵手本などは大英博物館に収蔵されていた。これを当然、日本の伝説や歴史的な挿話などを調査していたアンリ・ジョリーが閲覧し、アンダーソンによる数多くの書き込みを目にしたのである。ジョリーは宝物を見つけたような気分になったのである。

おそらくアンリ・ジョリーは最初文法書や教本などを使って、日本語を勉強し始めたと思われる。橋守国（『絵本写宝袋』、『絵本通宝志』、『謡曲画志』、『唐土訓蒙図彙』など）に記されたアンダーソンの英文の書き込みは、ジョリーの日本語学習をさらに後押しし、絵手本の絵と振り仮名が付いた本文と相まって、ジョリーが日本語読解力を向上させるのに貢献した。もちろん振り仮名はいわゆる変体仮名であるので、それなりに難解であった。

ここでアンダーソンが鉛筆で英文の書き込みを記した事情にも触れておきたい。アンダーソンは日本に滞在していた時アーネスト・サトウを教師として日本語を学び始めた。また、二人は日本美術史の本を共同で出版する企画を持っていた。そこで、橋守国などの絵手本の本文をまずサトウが読み、アンダーソンがその訳文または要旨を英文で記したのである。そのようなアンダーソン旧蔵書が大英博物館に収蔵され、ジョリーはアンダーソンが学んだ日本美術研究の同じ道をたどり始めた。通常、一度図書館に収蔵された書籍に書き込みを入れるのは困難であるが、書き込みがある書籍が図書館に収蔵されることはあるのである。もちろん、すべての絵手本や和古書に英文の書き込みが付いている訳ではないので、ジョリーは時には大英博物館図書館で日本人の手助けを必要とした。

①『日本美術の中の伝説』はA4判のサイズで、図版を含めた総ページ数が600を越える大部な書籍である。その原稿がある程度形になり始めた頃にジョリーは田中と知己になったと思われる。1907年頃の話である。『日本美術の中の伝説』の「紹介」の部分で、アンリ・ジョリーは田中萃一郎の貢献について次のように感謝している。

特に著者 [アンリ・ジョリー] は友人である田

中教授〔田中萃一郎慶應義塾大学教授〕と加藤章造氏〔ロンドンの日本美術商〕に対して、心から最も深い感謝の意を表さなければならない。前者〔田中萃一郎〕は翻訳と注釈の部分で著者を援助してくれた。田中教授は数々の翻訳をし、特別に価値がある歴史の知識を使って注釈を付け加えてくれた。それだけではなく、田中教授は本書が出版される前に、著者と一緒に本書の原稿を読み通してくれた。その校訂作業は本書の正確さを著しく向上させた⁵⁾。

田中文庫に含まれる『日本美術の中の伝説』には、著者の書込みと添付資料がある。アンリ・ジョリーの書込み（献辞）は、「Prof. Tanaka Suiichiro with the kind regard of the author Henri L. Joly London. Oct. 31. 1907」と記載されている（図3）。献辞の日付に注目してほしい。添付資料はクリスマス・プディングの温め方と食べ方を記したメモである（図4）。

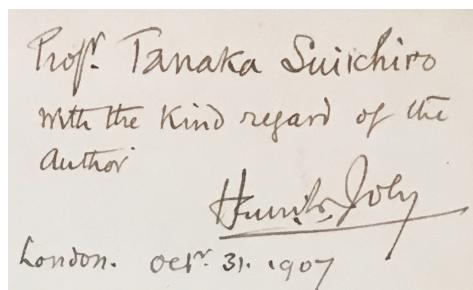


図3 1907年10月31日付の書入れ

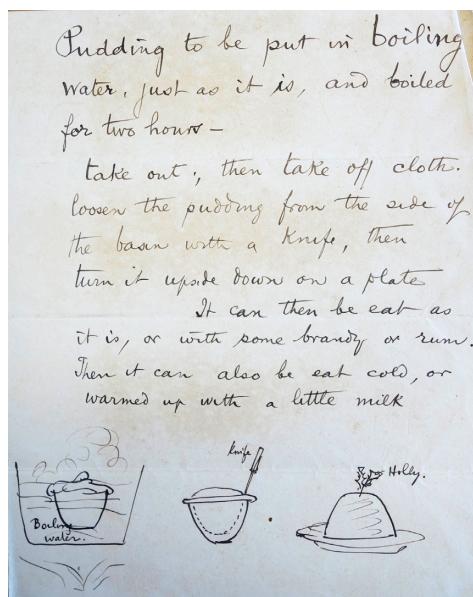


図4 クリスマス・プディングのメモ

また、『日本美術の中の伝説』のタイトルページによると、同書はロンドンの John Lane the Bodley Head という出版社およびニューヨークの John Lane Company という出版社から1908年に刊行されたことになっている。タイトルページの裏の情報によると、同書はロンドンとレディング〔ロンドン近辺の町〕で印刷されていた。

次に以上のことと簡単に解説してみたい。最初に出版社について説明する。John Lane という人物が Elkin Mathews という人物と共同で1887年にロンドンで The Bodley Head という古書店を始めた。その名称の由来は同店の入口近くに置かれていた Thomas Bodley という人物の胸像によった。ちなみに Bodley はオックスフォード大学の図書館であるボーデリアン図書館を創設した功労者である。その古書店は出版業も開始し、出版社になった。後に Elkin Mathews が手を引いたので、出版社名は John Lane the Bodley Head となった。その子会社または姉妹会社が John Lane Company である。両社は日本美術を含む美術関係の出版物を刊行した。また、John Lane はロンドンの日本協会の会員であった。

英国やアメリカなどの欧米諸国では、クリスマスのプレゼントとして書籍、特に美術書が選ばれる場合が多かった。『日本美術の中の伝説』は大部な美術書で、しかも値段が高かった。現在の日本円に換算すると、四、五万円ぐらいに相当する。そこで、同書にとって英國およびアメリカのクリスマス商戦は大変重要であった。同書は英國で印刷されたので、出版社としてはアメリカまで輸送する時間を考慮して、アメリカのクリスマス商戦に間に合うように出版する必要があった。おそらく、同書は1907年10月末頃に刊行されたと思われる。

一方、田中萃一郎は留学を終えて1907年12月に帰国した。おそらく1907年11月初め頃には英國を出発していたと考えられる。アンリ・ジョリーはロンドンを離れる田中萃一郎に出版されたばかりの『日本美術の中の伝説』とクリスマス・プディングを贈呈したのであろう（図3の献辞の日付、図4参照）。ジョリーは田中がクリスマスまでに日本に帰国するのを知っていたのであろう。

田中萃一郎とアンリ・ジョリーは『日本美術の中の伝説』をきっかけとして交際を始め、手紙や書籍を送り合いながら長期間にわたり交流を続けていた

が、1907年10月末頃を最後に再会することはなかつた。アンリ・ジョリーは1914年頃に日本旅行を計画していた。それが実現していれば、彼は田中萃一郎と東京で再会できたはずであったが、後述の理由で叶うこととはなかつた。

先述のとおりアンリ・ジョリーは長年電気自動車の会社に勤務して來た。彼は全部のエネルギーをそれに費やしてきたという。電気自動車の衰退または消滅などにともない、1914年頃に退職または失職が予想・計画されていた。ようやく仕事から解放されて自分の研究に没頭できると期待していた。そこで、畢生のライフワーク（日本刀装具史）を完成させるため、最後の資料収集を兼ね、北米を経由して日本に旅行する計画を立てていたところ、第一次世界大戦が勃発し、そして同時期に不治の病を宣告されたのである。アンリ・ジョリーは手書きで金工師の名前や花押などをトレーシング・ペーパーに書き、技術者が製図を複製する方法で印刷し、彼の最後の著作である『小杉軒集：日本金工師』⁶⁾を1919年にごく少数刊行した。その序文に以上のことが記載されている。彼は翌年1920年に逝去した。それが田中萃一郎とアンリ・ジョリーの交友の終焉であった。

参考文献

- 1) 幸田成友. 故田中教授を憶ふ. 三田評論. 1923, no. 316, p. 44
- 2) 幸田成友. 書籍涉獵の人. 三田評論. 1940, no. 509, p. 25-26
- 3) 新井白石, 稲葉通竜. The sword book in Honchō gunkikō. Chelsea, Henri L. Joly, 1913, p. iv
- 4) Anderson, William. Descriptive and historical catalogue of a collection of Japanese and Chinese paintings in the British Museum. London, Longmans, 1886.
- 5) Joly, Henri L. Legend in Japanese art : a description of historical episodes, legendary characters, folk-lore, myths, religious symbolism illustrated in the arts of old Japan. London, John Lane, 1908, p. xv-xvi
- 6) Henri L. Joly. [小杉軒集：日本金工史] : list of names, kakihan, collected from sword-mounts, etc : supplementary to Shinkichi Hara's "Meister ..." [London], 1919